

【書評】

芝野松次郎 著 『ソーシャルワーク実践モデルの D&D
—プラグマティック EBP のための M-D&D—』
(有斐閣, 2015 年, A5 判, 270 頁, 4,644 円)

志 村 健 一
(東洋大学)

はじめに

芝野氏が本書に先立って『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』を著したのは2002年であった。芝野氏らはソーシャルワーク実践に求められるアカウントビリティを担保するための方略として「トーマスのDR&U, 後にはD&Dに沿って多くの実践モデルを開発してきた」(芝野2002:128)のである。DR&Uは「開発的調査と活用」(芝野2002:120), D&Dはデザインとディベロップメントである。芝野氏はこうした経験を踏まえながら、「日常の実践において使いやすい簡便な実践モデルと実践マニュアルの開発手続きをまとめ」(芝野2002:128), 修正された(modified)D&D, すなわちM-D&Dを確立し, 提示したのであった。

M-D&Dは前述したように「簡便な」とされてはいるが, フロー・チャートを用いた論理的なプロセスが提示され, その手続きがフェーズに沿って詳細に紹介されており, 実践マニュアルのデザインまでを包括する総合的な実践モデルの開発理論である。このようにM-D&Dはソーシャルワーク実践に求められるアカウントビリティを担保することにとどまらず, 当時まだ浸透していなかったEBPを確立するための方法としても評価されるものである。また, M-D&Dは, 実践と研究をかい離させず, 実践と研究を融合させる日本におけるソーシャルワーク実践の包括的な研究方法として確立している。

評者は2012年の日本社会福祉学会春季大会シ

ンポジウム「エビデンス・ベースドの社会福祉研究・実践をいかに進めるか」において, パネリストとして芝野氏と同席する機会を得た。評者は質的研究の立場からテーマについて発言し, 芝野氏は実践評価の課題と展望をマイクロレベル実践の量的実践評価について発言した。それぞれが与えられた発題で扱うデータの質が異なっていたが, 研究と実践を結びつける理路の認識が共有できたことが印象深く残っている。芝野氏の発題では, 実践モデルをデザイン・ディベロップすることが実践プロセスのデータベース化につながり, EBPに寄与する方略の展望が紹介された(シンポジウムの報告は日本社会福祉学会の機関誌『社会福祉学』53-3を参照されたい)。

以上のように芝野氏の研究とその成果は一貫してソーシャルワーク実践のアカウントビリティを担保することに寄与しており, 現時点におけるその到達点として本書が位置づけられる。

本書の構成と講評

著者による本書の目的は「EBPのための, そしてEBPによって裏づけられる開発的研究の方法を具体的に示すこと」(ix)であるとされる。そしてその具体的な方略としてM-D&Dを詳細に紹介しながら, 開発例を示し, その実践モデルを普及・採用する道筋が描かれた。

第1章は「ソーシャルワーク実践モデルの定義を開発的研究の動機—D&Dへの道のり—」と題されている。本書を読み解くためには本書がどの

ような動機によって執筆されたのか、理解する必要がある。第1章でそれらが明確に述べられているので紹介しておきたい。著者は、本書執筆の動機を以下のように記している。

アメリカにおける EBP(エビデンスに基づく実践)の専門教育及び実践現場への浸透による援助プログラム研究開発の隆盛と、民間エージェンシーなどの実践現場や大学、そして企業 CSR として資金援助をする民間基金との活発な協働を目の当たりにした。しかし、研究開発の手法がまだ十分に確立していない現状も知る事となった。

こうした認識に触発され、筆者が以前に出版した著書をアップデートする必要性を痛感した。そこで、単なる前書のアップデートではなく、D&D と筆者が修正を提案した M-D &D (修正デザイン・アンド・ディベロップメント)とを徹底的に見直し、EBP に基づき、かつ、EBP を促進する開発的研究の新たな方法を提案し、その普及を奨励する著書を執筆することにしたのである。

前書では、社会福祉の実践にアカウンタビリティを担保するための社会福祉実践モデル開発であり、その方略としての M-D&D の提示であったわけだが、本書では、ソーシャルワーク実践モデル(以下、本書にならって SW 実践モデルとする)を研究開発する手法を明らかにすることが目的となっており、著者は SW 実践モデルを、「人が抱える問題の解決、あるいはニーズの充足を人の主体性を重んじながら援助する『手続き』である」(p.5)とし、以下のように定義した。

SW 実践モデルは、人が抱える問題の解決やニーズの充足をもちもろの社会制度としての環境との交互作用(接点)を通して営まれる日常の社会生活において、人の主体性を重んじながら問題の解決やニーズの充足を援助する専門的手続きであり、実践対象、実践意義、拠って立つ理論、援助手続きという4つの構

成要素について明確かつ詳細な記述と、援助効果についての一定の具体的な記述とによって説明されていなければならない(p.7)。

さらに、このような SW 実践モデルが、現場において実践される際には、より、詳細で具体的な記述、説明が必要になるだろう。個別性の高い実践現場においては、SW 実践モデルが具体的に記述、説明されていたとしても、ワーカーに一定レベルの判断が求められるわけだが、この判断の幅があまりにも大きかったり、ワーカー間での不一致が生じていたりすれば、実践モデルがワーカーによって変容されてしまうことになる。そのため実践モデルには規則や手続きへのコンプライアンスと同様のコンプライアンスが求められ、「SW 実践モデルが、全体として確実なコンプライアンスを促しつつ、必要なポジティブ裁量を支持し、不必要なネガティブ裁量を抑制することができれば、SW 実践モデル本来の効果が発揮されることになる。そしてどのソーシャルワーカーが実践しても同様の効果をあげうるものとなると考えられる」(p.8)とされた。そして、著者は「ネガティブな裁量を抑制し、ポジティブな裁量を促進するように、詳細なガイダンス(ナビゲーション)を具体的に提供できるように実践手続きを記述」(p.9)してあるものを「ソーシャルワーク実践マニュアル(以下本書にならって SW 実践マニュアルとする)」と呼んでいる。

前述したように、著者の研究は一貫してソーシャルワーク実践のアカウンタビリティを担保することに寄与してきた。これは著者が早くから EBP を啓発してきたこととも通底している。社会福祉の領域では、サービス提供者がますます多様化しており、また参入と撤退が混在しているカオス的な状況である。このような状況においては、ソーシャルワークも、その実践の価値、成果を明確に提示できなければ、状況に飲み込まれ、存在意義を否定されかねない。そのためにも実践の説明責任が求められるのである。著者は「アカウンタビリティは、実践を可視化することによって透明性を確保することである」と言い換えることがで

きよう」(p.13)と述べ、「アカウントビリティを動機として、こうした可視化にこたえるためにSW実践モデルの開発方法を提案するのが本書の目的である」(p.14)とした。

さらに、著者は、「研究開発するSW実践モデルは、対象とする人やその問題の違いはあっても、人と環境との接点に介入する実践モデルであると考えている」(p.23)。そして、そのような実践モデルを「PEIM (person environment interface management)」と名づけ、ソーシャルワークとしてのケース・マネジメントの重要性を認識している。本書は開発的研究の重要性を説くものであり、またPEIMがソーシャルワークにおいてきわめて重要であることを示すことも意図されたところに大きな特徴がある。

第2章は「EBP再考—プラグマティック EBPとM-D&Dの再帰性—」と題されている。残念ながら日本においてはアメリカのようにEBPが受け入れられていない。EBPが研究を実践の上位に置くことやEBPのためのエビデンスの階層のようなものが強調されて伝わり、ソーシャルワーカーたちが否定的にEBPをとらえてしまったようにも見受けられる。EBPとほぼ同時期に広められたナラティブ・アプローチのソーシャルワークへの親和性も、EBPの普及を妨げた一つの要因であるかもしれない。

『ソーシャルワーク研究』は2008年春、エビデンス・ベスト・ソーシャルワークの特集を組んだ。評者は、巻頭言において、エビデンスをめぐる三種のちからとして、エビデンスを選択するちから、説明するちから、そしてエビデンスを生成するちからについて述べた。この特集において、著者は「エビデンス・ベスト・ソーシャルワークの特質〔1〕 量的分析、開発的研究の立場から—」を担当されている。この論稿において、著者は生成されるエビデンスの質の観点からは量的調査としての要件を充たしていない調査結果も蓄積し、賢く活かすことを提唱し、また、開発的調査の必要性を論じており、EBPに関する著者の一貫性を確認することができよう。著者は『ソーシャルワーク研究』による2005年の「特集：わが

国におけるソーシャルワークの理論化を求めて」においても「エビデンスに基づくソーシャルワークの実践的理論化：アカウントブルな実践へのプラグマティック・アプローチ」という論稿を執筆し、M-D&Dを用いソーシャルワークに適したプラグマティックな実践モデル構築を構想した。

著者による一連の論稿は、やはりソーシャルワークが、いかにアカウントブルに展開できるか、そのための実践モデルの構築であり、ソーシャルワークで使えるEBPを構想したものであるととらえられる。本章第3節ではEBPを「エビデンス」「依拠する」「実践」という3変数で構成される概念として検討している。この検討により、エビデンスがリサーチによるエビデンスだけにとらわれないこと、エビデンスを選択し、使う側面において、トップダウン、ボトムアップの双方向性があること、エビデンスに依拠することにエビデンスを「つくる」側面があること等が確認された。これらを踏まえてエビデンスをつくるファクトリー、その枠組みとしてのM-D&Dが位置づけられたといえよう。よりソーシャルワーク実践にふさわしいプラグマティック EBPとそのためM-D&Dが明確にされたのである。

そして続く第3章は「ソーシャルワーク実践モデル開発の手続き」と題され、第2章で明確に位置づけられたM-D&Dがどのように展開されるのか論じられている。理論とはひとことで表すなら「説明できること」であるが、一般理論、中範囲理論、領域密着型理論等でその説明の範囲が限定される。著者はSW関連基礎理論、SW実践理論、包括的実践理論、限定的実践理論を整理し、ソーシャルワーカーの視点から見たSW実践モデルシステムを明示、限定的実践理論とSW実践モデルの関係性を明らかにした。

ところで、M-D&DがD&Dの簡略版、修正された手続きであることはすでに述べたが、第3節ではD&Dだけではなく、DR&U(開発的研究と活用)、R&D(研究開発)についても解説されており、それによってM-D&Dの位置づけ、意図を明確化することに成功している。そのうえでM-D&Dの手続きが解説されているため、M-D&D

に対する抵抗感が軽減され、やってみたいと思わせる、すなわち、エビデンスファクトリーの世界への参入の動機づけになっていると考えられた。

また M-D&D は ICT と親和性が高い。これは全体のプロセスがフロー・チャートで表されることにも由来するが、その活用の可能性が想像できないほど広まっているタブレット端末等で実践マニュアルを参照し、また記録を蓄積していくことが期待される。これは実践モデルに依拠した支援のエビデンスを逐次蓄積することにつながり、実践モデルの有効性の検証のデータ収集が実践の記録と同時にされることになる。M-D&D の EBP への寄与率の高さがうかがわれる一側面でもあることは興味深い。またこれはワーカーにとっても常に検索、参照可能なマニュアルがデスクサイド、あるいはポケットに入っていることになり、新たな実践モデルを試すことへの抵抗を軽減することにもなり、また動機づけにもつながっていると言える。

第4章は「開発の具体例」で、M-D&D による子育てコンシェルジェ実践モデルが紹介されている。この子育てコンシェルジェは前述した PEIM であり、「PEIM としての総合コーディネートによりよく表現できることばとして『子育てコンシェルジェ』を用いること」(p.156) が説明されている。そして実践モデルの最終叩き台としに必要な5つの構成要素のうち、「実践事例の記述」「実践意義の記述」「依拠理論の記述」「援助手続きの記述」が示された。

援助手続きの記述はフロー・チャートが用いられ、システムティックな記述になっている。また、実践事例の記述は、ワーカーが実践の概要を紹介するような記述であるため、比較的抵抗が少ないように思えるが、実践意義、依拠理論の記述は、調査・研究における先行研究の検討とそのまとめのような記述が求められ、ある程度の研究能力と知識が求められるようである。これは M-D&D が DR-U、そして D&D の潮流にあることから、逃れられない構成要素となるが、換言すれば、これを省いてしまうと EBP としての価値が弱められてしまうのであろう。

また本書では子育てコンシェルジェのタブレットを用いた画面が紹介されており、エントリーからアセスメント、計画と実践記録等がタブレット端末で運用できることが示されている。子育て世代の親にとって手に取ってみようと思えるものであり、普及に寄与するのではないかと考えられた。

第5章は終章であり、「M-D&D における普及・採用を超えて、維持という課題」に向き合った章である。著者はこの「M-D&D によって創り出され、プラグマティック EBP において実践され、洗練され、普及・採用 (dissemination) される SW 実践モデルを、実践の現場に定着させようとするときに生じる問題について検討」(p.203) した。評者にとってソーシャルワーク実践はグラウンデッド・セオリーに代表されるデータからたたき上げる帰納的な理論生成の研究と論理実証的な演繹的研究が、らせん状のように進行する中で育まれるものであると認識しており、それは特に、ソーシャルワーク実践が地域を基盤としたマクロな実践を標榜する中で、継続的なプロセスであることを認識している。著者も「開発した SW 実践モデルの普及・採用が一応終結した後も、M-D&D 及びプラグマティック EBP の再帰的特性として研究開発は継続され、新たな研究開発のサイクルへ進むことになる」(p.206) と述べており、実践現場への定着、維持を課題として言及している。

前述したように M-D&D は ICT と親和性が高く、ICT を活用することで M-D&D で創り出される SW 実践モデルやマニュアルは、いつそう普及・採用されてくるはずであろう。しかし、こんにち ICT を活用したシステムはクラウド上の運用が想定されており、それは実践現場から離れた場所にある信頼可能なサーバーにデータが蓄積されることでもある。このようなサーバーの管理、維持、またセキュリティの問題等は、具体的な運用レベルの課題ともいえるが、実践モデルを現場で維持していくためには、初めから想定されている課題でもあり、費用や責任の所在等、検討しなければならない課題である。

また別の視点から、このような具体的な課題だけではなく、パターンリズムとは言わないが、熱

い心に依拠したウォーム・ハート・ベスト・プラクティスにある種の価値を見出す多くのワーカーに、どのようにしてプラグマティック EBP を教育、トレーニングしていくべきかという課題も残っているだろう。大学でのソーシャルワーカー養成にもこのような視座を取り込み、長期的に取り組んでいかなければならない。このような課題にも D&D し続けることの必要性を認識するものである。

終わりに

グローバル定義において、「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である」とされた。著

者は、ソーシャルワークが専門職であるためにその実践がいかにアカウンタブルなものであるか、そのことに寄与する研究を一貫して継続されている。本書は、学問としてのソーシャルワークの側面から、研究者が継続して実践にコミットしていく必要性を再認識しなければならないことを伝えている。

ソーシャルワークも研究も、問題解決という一面を共有する。そのための創造的なプロセスが M-D&D によって描かれている。本書によって、実践モデルの研究開発が促進され、よりソーシャルワークらしいプラグマティック EBP が描かれ、一連のプロセスが実践にしっかり根づくよう期待したい。実践者にとっても、研究者にとっても、学びの多い一冊になるであろう。